仙台城 now！vol.8

仙台市教育委員会文化財課
令和５年９月29日

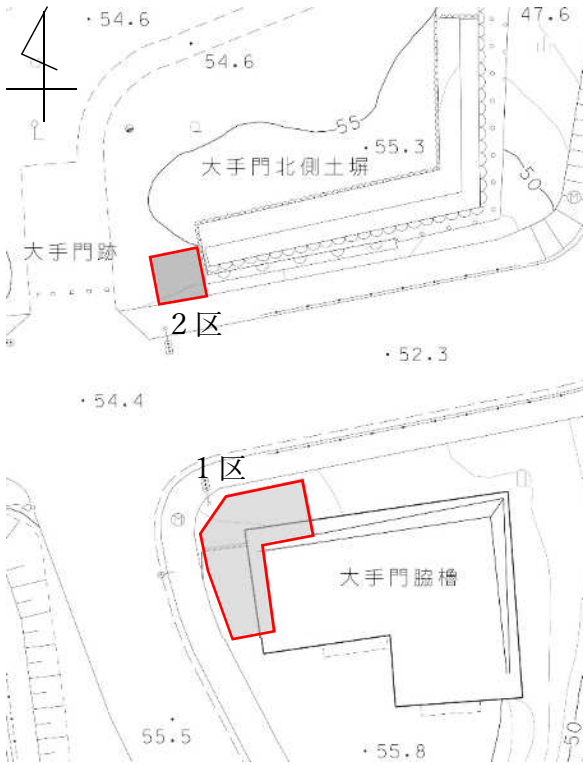
仙台城跡大手門跡の発掘調査が始まりました

今年度から、大手門跡周辺の発掘調査が始まりました。調査は５年間で計画しており、今年はその１年目にあたります。

調査では将来的な復元に向け、柱などの痕跡を探すことで門の位置を確認するほか、大手門周辺の様子も含めて把握することを目指します。

大手門跡周辺の現況

仙台城の大手門は、江戸時代を通じて正門として存続していました。昭和６(1931) 年には、大手門と大手門脇櫓が国宝に指定されましたが、昭和 20(1945)年 7 月の仙台空襲により焼失しました。焼失した後に道路が掘削されるなど、周囲で造成が行われて現在の状況に至ります。



今年の調査地点

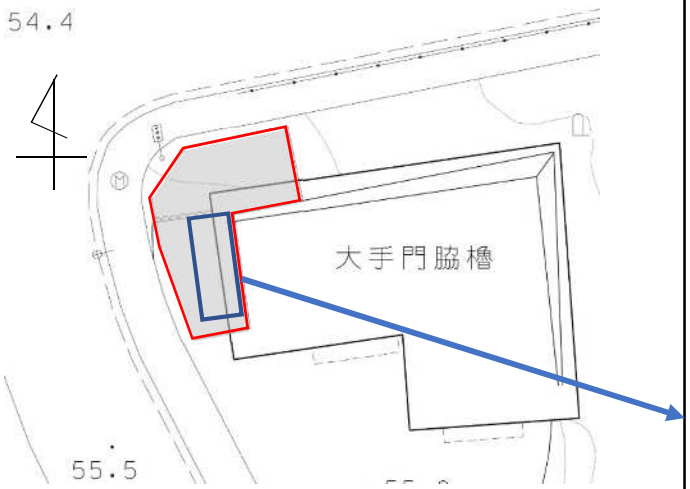
今年度は古写真や図面等を参考に、大手門が建っていたと考えられる地点で調査を実施します。大手門の柱などの痕跡を確認し、門の位置の特定を目的としています。

大手門の推定位置の大半は、現在の道路や歩道の範囲と重複しているため、再建された脇櫓の西側（１区）と、現存する大手門北側土塀の西側（２区）の２地点で調査区を設定しています。

野外調査期間は９月から 11 月を予定しています。

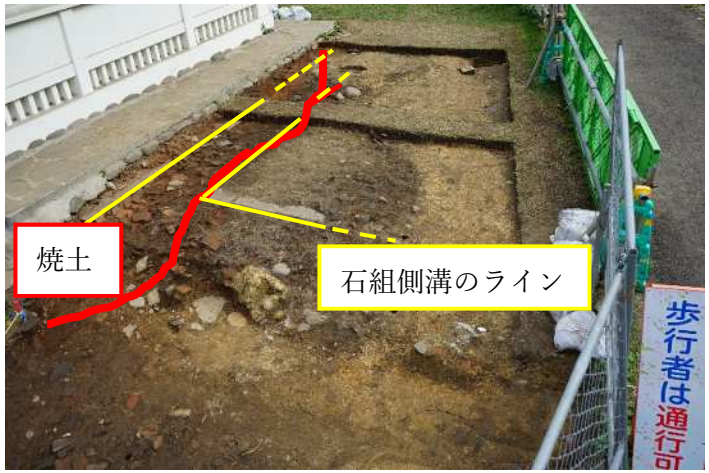
現在の調査状況

再建された大手門脇櫓の周辺（１区）から調査を開始しました。表面の土（表土）を剥ぐと、黄色や暗い茶色の土などの異なる色の土がそれぞれ広がっており、大手門周辺が現在までに度々整地されていることが窺えます。遺物としては主に瓦が出土しています。



表土掘削後の状況（北から撮影）

焼けた土の広がりと石組側溝



主に大手門脇櫓の西側で焼けた土が広がっています（写真上：北から撮影）。焼けた瓦も確認されることから、空襲で建物が焼けた際に熱を受けたものと考えられます。

再建された脇櫓の西側では、石組側溝の一部が確認されました（写真下：北東から撮影）。

大手門と大手門脇櫓に伴う側溝として存在していたものと考えられます。古写真や過去の図面でも、焼失前の大手門と脇櫓の周囲を溝が巡っていたことが確認されています。